



## 特集「卒業のその先も」

3月は何かの転機になることが多い時期です。出会いと別れの季節とも言われ、慣れ親しんだ場所から離れ、新しい地での出会いに期待と不安で胸がいっぱいの人や今までお世話になった人との別れを惜んでいる人もいるかもしれません。

この季節に聞くことが多い「卒業」は、物事の終わりのように聞こえますが、次への新たな始まりでもあります。今回は本市へ地域おこし協力隊員として移住し、卒業した後も宇和島に住み続け地域を盛り上げてくれている皆さんの今を紹介します。



## 地域おこし協力隊とは



地域おこし協力隊は、都市地域から過疎地域などの条件不利地域に住民票を異動し、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PRなどの地域おこし支援や、農林水産業への従事などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る国の制度です。隊員は各自自治体の委嘱を受け、任期は概ね1〜3年です。

令和3年度には全国で約6千人の隊員が活動していて、総務省は令和8年度までに1万人に増やすという目標を掲げ、強化に取り組んでいます。

本市はこれまで16人の隊員を迎え、地域の振興や市の重点施策の発展などの地域協力活動に取り組んでもらいました。その中で、卒業後も本市に定住し、地域に貢献している人たちに話を聞きました。





## 01. 西島 百合子 さん

地域おこし協力隊を卒業後、(株)宇和島プロジェクトへ入社。活躍の場が「観光としての海」から「産業としての海」に変わり、新たな気持ちで挑戦しています。

### 定住を決めた理由

西島さんが宇和島への定住を決めた理由は「人」だと言います。移住者を温かく迎え入れてくれる優しさや、かんきつやタインなどの産業に関わる人たちが自らの仕事に強い信念と熱意を持ち、よりよくしていきたいという前向きな思いを感じ、自分の経験もその力になればと思ったそうです。

### まずやってみる精神

西島さんはこれまでIT企業や青年海外協力隊など、何事もまずはやってみるの精神でさまざまなことに挑戦し続けてきました。地域おこし協力隊の闘牛中にも、伝統行事の闘牛をコロナ禍で会場に来られない人でも楽しめるようにと、新たな試みとしてオンライン配信を行いました。現在の仕事でも生産現場へ来て楽しんでもらう養殖体験

ツアーを企画するなど、工夫を凝らします。

他にも、IT技術の導入により事業の効率化を図る「スマート漁業」を推進することで生産者の負担を減らしたり、商品PRの仕方を工夫したりすることで自分の好きな宇和島のおいしい魚をもっと世界中の人に知ってもらいたいという思いが西島さんを動かしています。

### 挑戦できるまち

西島さんは「地元の人でも移住者でも、ここで挑戦できることはまだまだたくさんあるし、協力してくれる人もきつといる。これから何かに挑戦しようとしている人を見かけたら、私がしてもらったように、少しでも力になってもらえるとうれしい」と宇和島がこれからは挑戦し続けられるまちであることを願います。



## 初めての島暮らし

上甲さんは宇和島から東京へ出て働いていましたが、両親が高齢になってきたことで地元へ帰ろうと決意。戸島の地域おこし協力隊の募集を見つけた時、これだと思い故郷へのUターンを決めたそうです。

島の暮らしは初めてでしたが、交通手段や物資が限られている生活だからこそ、そのめりはりも生まれ、その心地よさにもどんな惹かれていききました。豊かな自然から得られる産品を売り込む仕事を楽しみ、今も自分が食べて感動した「嘉島おふくろ隊のところてん」を世界で売れる商品にしたいと試行錯誤を重ねています。

## 変化を恐れない

上甲さんは「移住者が

増えると自然と宇和島の人も変わっていく。外からの刺激によって受け入れられる側の考え方も変わっていく」と話します。

働き方の変化などで地方移住への関心が高まっている今だからこそ、業種や出身関係なく地域に入っていく人たちをどんな受け入れることが大切だと熱を込めます。

## 3年後を見据える

上甲さんにこれから地域おこし協力隊になる人へのアドバイスを聞くと「3年後を見据えて動くこと」と答えます。「地域へ溶け込むことだけでなく、新しいことに挑戦してほしい。自分の事業を持てるチャンスとして3年間しっかり準備をすることが、地域と自分の両方にとって良い結果になる」と後輩たちにエールを送ります。

## 02. 上甲 教文 さん

地域おこし協力隊を卒業後、戸島の人たちと(株)とじ萬を立ち上げ、海底熟成酒事業や介護事業、海産物の養殖、加工商品開発など幅広い事業に取り組んでいます。





## 気付いた魅力

渡部さんはお遍路で訪れた宇和島の風景が強く印象に残り、職種に関係なく宇和島で働いてみよう、地域おこし協力隊として移住してきました。これまでのさまざまな仕事の経験から宇和島産品のクオリティーの秀逸性と未来性に魅力を感じ、定住への気持ちが強くなりました。

## ストーリーを届ける

渡部さんが宇和島産品のクオリティーの高さを感じたのは、かんきつや真珠などあらゆる産品の品質だけでなく、生産者とその産品にかける情熱だと言います。自身がかんきつ農家の1人になったからこそ、毎年違う天候などに左右されながらもおいしい果実を育てる大変さや難しさ、楽しさにやりがいを感じている

と忙しさの中にも充実感をにじませます。

渡部さんは「宇和島産品を、商品としてではなく、ストーリーとして届けたい」と思い、生産者になった。今の目標は縁あって託された1haの園地を10年後に思いを込めたすばらしい園地に育つよう全力を尽くすこと。農家として生涯修行であり毎日が挑戦」と語りま

## 3つの「感」を大切に

渡部さんにこれから協力隊になる人へのアドバイスを聞くと「宇和島への感動・感謝・実感を常に大切にすること。常に移住者としての俯瞰的な目線という武器を忘れずに、卒業後も宇和島を愛し、貢献し、自らの生活を充実・成長させる事業に携わること」と話してくれました。

## 03. 渡部 武士 さん

地域おこし協力隊を卒業後、着任直後に起業したかんきつジュース販売事業を法人化。かんきつ農家としても奮闘し、全国各地のフェアへ積極的に参加して自らの手で生産から販売まで行っています。







宇和島市藤岡地  
生涯学習



## 04. 朝倉 雪江 さん

地域おこし協力隊を卒業後、蔭淵で岩ガキ・藻塩の広報を行うほか、IT関係の仕事しながら地域の情報発信サイト「HubPLACE」を立ち上げ、情報拠点の構築に注力しています。

### 蔭淵はリゾート地

朝倉さんが蔭淵を選んだ理由は、人の距離感がちょうどいいと思ったと話します。初めて訪れたときに地域の人と交流する機会があり、都会での生活ではお金を払っても得られない心の温かさを感じ、地域おこし協力隊として移住することを決めたそうです。

朝倉さんの仕事は自宅での作業が多く、蔭淵の静かな環境が集中できると感じているそうです。仕事が一段落した時に自然を眺めるひとときもぜひいたく時間の一つ。蔭淵は朝倉さんにとつてのリゾート地だと笑顔で話します。

### 地域の情報拠点

朝倉さんは、自分の得意分野のIT技術を使って、地域の情報が集まる拠点をWeb上につくる

うと活動しています。今ではSNSなどで誰でも気軽に情報発信できるようになりましたが、まだまだ知られていないことがたくさんあると感じるそうです。「せっかくだいものがあるって伝わらないのはもったいない」と、朝倉さんは大好きな蔭淵のことだけでなく、南予地域の情報を点ではなく面で届けられるような場所をつくることを目指します。

### 夢に向かって行動

朝倉さんは「どんな場所でも自らが具体的に行動することで夢は実現できる。自分がすべきことと周りにやってほしいことをはっきりさせることで人と人がつながり、協力してくれる」と話します。人とのつながりを大切にしながら、地域情報の拠点づくりに向けて進み続けています。



**日常の豊かさの先に**

今回紹介した4人以外にも地域おこし協力隊を卒業後も本市へ定住し、地域産業の維持や強化に取り組んでいる人たちがいいます。それぞれの場所、それぞれが思う魅力に出会い、その魅力を自分の手で磨いて高めていこうと決意し、新天地での暮らしに挑戦しています。

しかし、それは簡単なことではありません。地域の人や今までのつながりなど、支えてくれる人が周囲にいて、初めて乗り越えられるものです。どんなに高い技術や豊富な知識と経験があっても、地域の活気を取り戻すためには、そこに住む皆さんの協力が必要です。

これから春を迎え、「卒業」という新しいスタートを切った人と出会う機会が増えてくると思います。もしそんな人が困っている姿を見かけたら、ぜひ声をかけてあげてください。その出会いが地域を、あなたの日常をこれからもっと豊かにしてくれるかもしれません。